

米国先住民と都市空間

水谷裕佳(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

本発表は、発表者の2006年6月から2009年5月までの在外研究と、2009年8月~9月に行われた現地調査において収集された資料に基づき、都市部における米国先住民の空間利用とアイデンティティーやカルチャーショックの問題を取り上げようとするものである。具体的な調査地は米国カリフォルニア州サンフランシスコ市周辺地域(オークランド市、バークレー市を含む)で、調査方法は参与観察、聞き取り、図書館や資料館における文献収集である。同地域には、伝統的に居住する先住民の人々に加えて、20世紀半ばの米国政府主導による先住民都市移住政策によって各地から安価な労働力として先住民の人々が集められたため、多くの都市先住民の人々が暮らしている。現在米国には少なくとも550、数え方によっては700程度の異なる先住民族が存在し、それぞれの民族が独自の言語、文化、社会を持っている。しかしながら都市部においては、汎先住民(Intertribal)文化や社会と呼ばれる、先住民族間の差異を越えた文化や社会が形成され、汎先住民としての連帯が保たれてきた。発表者は3年間在外研究を行ったカリフォルニア大学バークレー校で先住民大学院生の会に所属して、サンフランシスコ地域の都市先住民とも深い関わりを持ちながら活動を行った。そして、日々先住民学生や都市先住民の人々と接する中で、彼らが抽象的な生きづらさを語る場面に繰り返し出会ったが、その生きづらさが具体的にはどのような事象として理解できるのか考えてきた。2009年夏の調査では、カリフォルニア大学バークレー校の学生や卒業生10名程度を対象として、1対1の対面調査で1人当たり1時間~3時間程度の聞き取りを行い、大学生活や都市部の生活の中で先住民の人々が生きづらさを感じる理由について調査した。結果として、大学や都市の中で先住民の人々に割り当てられた空間が極めて少なく、いわゆる居場所のなさが生きづらさにつながっているのではないか、という結論に達した。現時点で学生以外を対象とした聞き取り調査はまだ実施できていないが、サンフランシスコ市周辺の先住民による空間利用と重ね合わせて考えた場合、先住民の人々の不満や不安がより実感を伴って理解できる。サンフランシスコは多民族を唱える米国の中でも民族的に多様であるとされており、市内および周辺には様々なエスニック街が存在し、人々が立ち寄りたり情報を交換したりする場となっているが、米国先住民についてはそのような場所が存在しない。過去を振り返ればサンフランシスコ市内にも都市先住民センターが存在したが、焼失してしまった。さらに、オークランド市にも都市先住民センターがあるものの、センターは比較的治安の悪い場所に立地しており、会館時間は週2回程度、さらに平日の夜間であるために、身の安全、交通手段、学校や仕事との兼ね合いなどによってセンターを訪ねられない都市先住民の人々も多い。汎先住民の祭りであるパウワウも都市先住民の集う場であるが、公共の体育館や公園で不定期に開かれるもので、恒久的、恒常的に人々に開かれた場所ではない。都市先住民の支援に関して取り上げられる議題は、経済支援を中心とした社会福祉、医療サービス、教育機会の提供、文化の維持などが多いが、彼らが恒久的、恒常的に利用できる安全かつある程度の大きさの空間の確保についての議論も必要ではないだろうか。都市部や大学のような公共機関において先住民のための空間を確保することは、都市先住民の抽象的な不満や不安を緩和し、ひいては彼らの精神衛生の改善やアイデンティティー喪失の歯止め役に役立つと考えられる。

【先住民、都市、空間、アイデンティティー、アメリカ合衆国】